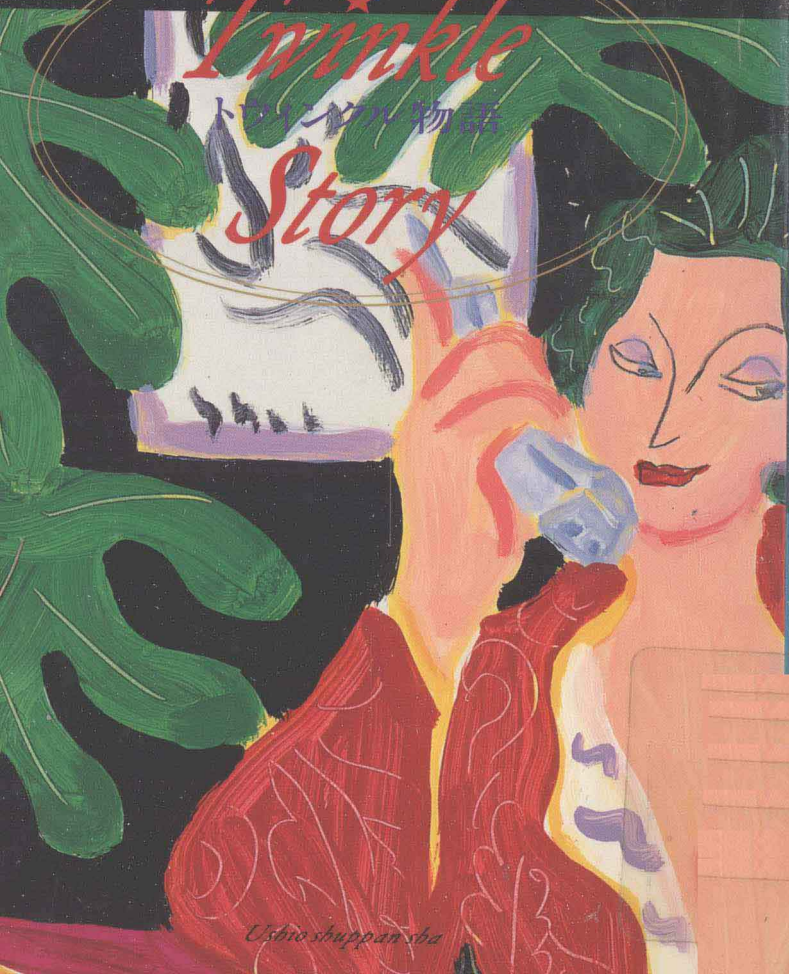
森瑤子

Twinkle Story

トゥインクル物語



Ushio shuppan sha

トウィンクル物語　定価1500円
1992年7月10日印刷
1992年7月25日発売
著　者　森 瑤子
発行者　富岡勇吉
〒102 東京都千代田区飯田橋3-1-3
発行所　株式会社 潮出版社
電話　(3230)0781(編集)　(3230)0741(営業)
振替東京5-61090

印刷・製本　大日本印刷
落丁・乱本は送料小社負担にて、お取り替えいたします。
©Yoko Mori 1992 Printed in Japan
ISBN4-267-01292-X　C0093

トウィンクル物語

Twinkle Story

by

Yohko Mori

潮出版社

林 瑤子

トウィンクル物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

トウィンクル物語　目次

[第一話] 街の灯 ―― 7
[第二話] タワーの灯 ―― 15
[第三話] 電話ボックスの灯 ―― 23
[第四話] ホテルの灯 ―― 31
[第五話] ハイウェイの灯 ―― 39
[第六話] 机上の灯 ―― 47

[第七話] 食草の灯 55
[第八話] 摩天楼の灯 63
[第九話] 空港の灯 71
[第十話] 窓の灯 79
[第十一話] 劇場の灯 87
[第十二話] 港の灯 95
[第十三話] 地球の灯 103

装丁・江島　任

挿画・橋本シャーン

トウィンクル物語

［第1話］

街の灯

Twinkle story

#1

Town Light

たそがれ刻。

昼と夜の粒子が微妙に混じりあう青ざめた時刻。あちこちでネオンサインが瞬き始め、街は夜の装いにとりかかる。

一日のうちで彼女の一番好きな時刻。仕事から解放されて。約束の場所に向かう足取りも軽い。空気の中にはもう春の香りがする。大きく吸いこんだとたん、クシャミがひとつ。街中に飛びかっている花粉のせいかな、と思う。

走りだしたい欲望を抑えなければならない。

彼に逢いたい。今月はまだ一度も逢っていなかった。先週の約束は直前になって彼の残業でキャンセルされたから。

友だちは「あなたたちまだ続いているの?」とあきれた顔をする。彼女たちみたいに遊びではないもの。続いているどころか、日を重ねれば重ねるほどあのひとに対する思いは深くなる。

「今でも、彼に逢う時は、胸がドキドキするのよ」

と彼女は答える。ドキドキしなくなったら終り。彼女は通りすがりのショー・ウィンドーの前で立ち止まり、中の鏡の自分自身の姿を点検する。彼の方だって同じ思いでいて欲しい。私に対して、ドキドキしていて欲しい。彼女は鏡に向かって微笑し、再び歩きだす。

すでに夜の黒い粒子があたりを支配している。街の灯が急に饒舌になったみたいだ。歩道にこぼれる店々の明りが、光の絨毯のように延びている。

いつもの店に入る前に、彼女は少し緊張する。六時半ぴったり。彼はいるだろうか？けれども彼はいない。まだだった。

待たせるより、待つ方が好き。それは本当だった。彼女はジントニックを前に置き、恋の時間の中で最も贅沢な、待つという時間を楽しみ始める。

七時が過ぎていく頃、彼女は少しだけ不安を覚える。カフェの窓の外はもう完全に夜の世界。いつも一緒にいたい、とふと思う。もう二度とさよならを言う必要もなく、別々の部屋に帰っていかなくてもいいように。あのプロポーズを受けようかしら。もうたっぷり彼を待たせたのだもの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

約束の時間より四十五分が過ぎた。先週は急にキャンセルだったけど、その前の時も、そういえば三十分彼は遅れて来たことを思いだす。何かが胸の底できゅんと痛む。

ようやく彼が現れる。座るなり煙草の火をつける。とても疲れている様子を隠そうともしない。

どうして彼は私の方をろくに見ようともしないのだろう？　疑問が浮かび上がるが、彼女はそれをのみこんで、明るい声で言う。

「ごめん、くらい言ったら？　一時間近く待たせたんだから」

非難のつもりなど毛頭なかった。それなのに彼は不機嫌に眉を寄せる。

「待つのが嫌なら、待たなければいいんだよ」

忙しすぎるのだ、と思う。会社で何かあって彼は苛立っているのだ。でも彼が彼女に対してドキドキしていないことは確かだ。この瞬間――。

「待つのは平気よ。あなたのことなら、朝までだって待てるわ」と寛大な声で言った。

「そういうの、重いんだよな」

溜息と共に言うその言葉が、彼女には信じられない。どうしたのだろう？　いつもの彼じゃない。

「だったら、重荷をなくしてあげる。もう待ち合わせなんてしなくていいようにしましょう」

「どういうことだい」
「例のプロポーズ、まだ有効？」
彼女は少しも疑うことのない澄んだ瞳で、彼をまっすぐにみつめた。
すると、彼は視線を落とした。その直前に男の瞳の中を過ぎった狼狽の色を、彼女は見逃さない。胸が冷たくなる。
「有効なわけ、ないわよね」
と自分の方から冗談めかして彼女は否定してしまう。彼に否定されるよりずっと楽だから。
「大昔のプロポーズだもの、時効よね」
「あの時は本気だったんだよ」
言いわけじみた彼の声。あの時は？
では今はもう違うの？　彼女の胸は張り裂けそうだ。
「知ってるわ、あなたが本気だったこと」

なぜ、あの時プロポーズを受けなかったのだろうか。今となっては自分が信じられない思いだ。

「タイミングの問題だからな」

また新しい煙草に火をつけながら彼が呟く。さっきのがまだ喫いかけなのに気づいてぐいとひねって火を消す。

「タイミングじゃないわ。愛の問題よ」

彼女は急に一人になりたくてたまらなくなり、片手を差し出す。二人は唐突に握手をし、彼女は立ち上がる。驚いている彼を残してカフェを出る。夜は今や、厚化粧と脂粉の香りに満ちて、どぎつく彼女の眼に映る。一人になりたい。家に帰りたい。彼女は自分の部屋の明りを思い浮かべる。人懐かしい黄色味を帯びた小さな明りだ。いつのまにか泣きながら、彼女はその小さな明りに向かって歩きだす。

[第2話]

タワーの灯

Twinkle story

#2

Tower Lights

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton